

SONRISA

そんりさ

Vol.133



グアテマラ総選挙

ペルーの鵜の群れ。成鳥は目の周囲が赤い

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- | | | |
|----|---------------------|-------------|
| 02 | グアテマラ総選挙 | ……石川 智子 |
| 06 | ボリビアだより 国際協力の仕事を続ける | ……藤田 護 |
| 07 | ペルー 鵜とともに暮らす3 | ……古谷 桂信 |
| 10 | ラ米百景「キューバの恋人」 | ……伊高 浩昭 |
| 12 | 音楽三昧♪ ペルーな日々 | ……水口良樹 |
| 14 | メキシコ食巡り | ……ミゲル・アクーニャ |
| 15 | 民芸品販売事業の提案 | ……佐々木玲子 |
| 19 | ニュースクリップ | ……サザエ |

【グアテマラ総選挙】

石川智子

去る九月十一日、大統領・副大統領、国会議員(百五十八議席)、市長(三三三市)、中米議会議員(二十議席)を選出するための総選挙が行われた。

大統領選では有効票の半数以上を獲得する候補者がなかったため、上位二者による決選投票が十一月六日に行われる。全て就任は来年一月十四日で、任期は四年間である。

大統領選の首位は愛国党のオットー・ペレス氏(六十才)で得票率三六%、二位は、革新自由民主党のマヌエル・バルディソン氏(五一才)で二三%。計十政党が大統領選に参加、リゴベルタ・メンチュウ氏(九二年ノーベル平和賞)は唯一の左派系候補として二度目の参加だったが、三%の支持に留まった。

《「断固たる手」が優勢に》

首位のペレス氏の売りは、治安問題への「断固たる手」。元軍人で、退役後の二千年、硬く握った拳をロゴマークに愛国党を設立。四年前にも出馬し、決選投票で「治安問題は知能で解決」を約束する希望党アルバロ・コロン氏に敗れた。現政権下での治安悪化を背景に「やはり『断固たる手』が必要」という意識を広く植え付け、支持を広げてきた。

しかし内戦中のジェノサイドや多くの人権侵害事件への関与が指摘されており「虐殺者」としても名高い。弾圧が最も厳しかった八〇年代初頭、軍による多数の虐殺や焦土作戦が行われたキチエシル地域の軍駐屯地を指揮し、情報機関や参謀本部のトップを務める

などの経歴を持ち、ヘラルディ司教暗殺への関与も問う向きもある。

愛国党は、国会五四議席と百二十市長を獲得した。バルディソン氏は、現与党で二期目の国会議員当選を果たしつつ、すぐに脱退して革新自由民主党結成に動いた。相当の金額を積んで他党議員を引き込み、公共事業費を有利に配分するなどしながら党の基盤を作ってきたと言われる。選挙戦では、労働者支援としてボーナス一月分増額と、治安対策として死刑執行復活を前面に押し出し、農民への肥料配布等も約束。ウケを狙うポピュリスト。弁護士であると同時に、麻薬組織活動が目立って活発な地元ペテン県に多数の企業を所有する企業家、様々な面で駆け引きがうまいとも言われる。革新自由民主党は、国会十四議席と二十市長を獲得したのみ。決選投票に向け、両党とも他党の協力を取り付けに動いている。また、どちらも副大統領候補は女性であり、グアテマラ初の女性副大統領が生まれることになる。

《左派系は足踏み》

リゴベルタ・メンチュウ氏はマヤ女性としても唯一の大統領候補だった。母体はマヤ政党ウイナツク(人間の意味)と元ゲリラ二政党の連合による左派拡大戦線だが、大統領選三%、国会二議席と四市長を獲得するに留まった。現在の左派系は、内戦終結直前の九五年総選挙から参加を始め、九九年総選挙では元ゲリラの革命党が一二%を取ったが、その後は分裂・連合を繰り返しつつ二〜三%台の支持にとどまっている。同じ顔ぶれの上層部が意思決定を握り、左派統一の掛け声とは裏腹に閉鎖的など、内側からの批判も多い。左派系内でも政党と市民組織・一般市民との間に大きな距離があり、長期的視野に立った左派の政策提言や行動計画をまとめる動きが必要と言われている。

議員選では、愛国党に続く希望党(他党との連合)が四八議席など、単独で過半数を越す政党はない。もともと、当選後の鞍替えは日常茶飯事、四年の内に体制が大きく変わる。市長選では愛国党と希望党が約三分の一ずつを獲得。市長選のみ参加できる市民政治団体の活動が和平合意後活発化した。今回の当選は十四市のみで縮小傾向にある。

《女性たちの漸進と課題》

全体の投票率は六十六%で、過去数回の選挙を上回った。地方で特に女性の選挙人登録が伸び、以前のようには首都の勝者が当選するという状況ではなくなり、政党は農村部をも視野に入れざるを得なくなっている。しかし、女性・先住民の被選挙人参加は相変わらず低い。女性の当選議員は十九人で一二% (前回同数)、当選市長では、女性は七人で二% (前回同数)、先住民は百十人で三三% (前回三七%) だった。女性・先住民組織からそれぞれの一定参加割合を政党に義務付けるべく法改定を要求する声は以前からあるが、具体化していない。

また、選挙戦が一二九日間と長いことや選挙資金の不透明さ、選挙管理局の弱さなどの問題もあり、選挙政党法の改定あるいは新法制定が求められている。今回も選挙違反(告示前からの宣伝活動、買収、脅し他)、政治的殺害(市長候補が競争相手二人を殺害他)、投票終了後の暴動(投票箱を燃やす他)も多くあったが、とりあえず「民主的選挙」が成立した。

ボリビア便り（その七）

—ボリビアで国際協力の仕事を続ける—

藤田 護（注一）
二〇一一年九月八日

以前のボリビア便り（その四）と（その五）では、ボリビア（ラパス）在住の栗原重太さんのインタビューをお届けしましたが、今回と次回はJICA（国際協力機構）のラパス事務所現地職員をしている平柄早苗さんのインタビューです。

私は以前二〇〇三年から二〇〇六年まで三年間、在ボリビア日本大使館で専門調査員という仕事をしていましたが（大使館の中で経済・政務・広報文化・経済協力を担当していました）、平柄さんはほぼ同時期にJICAの海外青年協力隊で来ていて、その時からの知り合いになります。互いにそれぞれの立場でボリビアに関わり続けてきました。

国際協力の仕事は、仕事に就くための安定した見通しが開けないというのが若い人たちにとってのネックになったりもしがちなのですが、現地で具体的な人々とのやり取りと自分の感覚を大事にしながらか、自分の道を歩いてきた、そういう仕事のしかたがここにあると思います。これは他の人がそのまま真似をするという類のことではないですが、むしろ「キャリア設計」とはまた異なった、偶然の機会や出会いとともに自分の道を開いていく、道が開かれていく感覚が実際にはより重要なのではないかと私は思っています、そのような経緯で今回インタビューをお願いしました。

また当時のボリビアの社会や、日本の国際協力の仕事の内部の様子が、平柄さん独自の視点から語られているのも、興味深いところだと思います。

なお、インタビューは二〇一一年九月三日にラパス市内のカフェで行いました。書き起こす際には、錯綜しないように間に挟まれる言葉を少し削りました。基本的には話された言葉をそのままにしてあります。書き言葉を「情報」として読むことに慣れた人にとつては若干読みづらいかも知れませんが、話された言葉なのだということを思い起こしながら読んでいただければと思います。そして、実はまだ聞いていない話があるので、また暫くしたところに続編をするつもりでいます。

1. 協力隊員になるまで

—高校、大学、そして就職

藤田 —最初に、ボリビアに来る前の、大学で何を勉強をしていた、どう就職して、なぜ協力隊で来ようと思ったのか、その話を少し聞かせてもらえますか。

平柄 —大学は倫理学が専門だったんですね。で、西洋哲学の本とかばかりを読んでいて。もともと何でそこに行つたのかというと、今思えばすごい若気の至りなんですけども、人が生きていくには何が大切かなとか、何が幸せかって研究した人がいるからってことで、その辺の研究をしてみたいと思いました。

元々中学校の時に英語を習い始めますよね、その時にたまたますごくいい先生に出会って、一番好きな科目が英語だったというのがずっと続いていて、高校の時に姉妹都市間の交換交流に行つたりとか、そういう、いつか海外と関わって仕事をしたいなっていう志向があったんだと思います。まあそれは普通の大学生や学生が思うことと一緒になんですけど。

で、英語はずっと好きだったんですけど、高校に入るといわゆる受験英語になってしまつたと。

で、倫理っていうのがその受験だけの授業の中にあつて、唯一受験科目じゃない：確か三年まであつたと思う、ちよつと不思議な学校なんですけど、なんか戦略的にどうなのかっていう：（笑）、だけど後々考えれば自分の人生にすごい影響を与えてたんですけど、その倫理の先生っていうのが、いわゆる受験科目をしている中で、こう教科書なんて読ませなくて、世の中の脳死問題とか尊厳死の問題だとか、今思い出すことはそういうところなんですけど、一つのテーマを毎回こう持つてきて、その社会的に起きていることに対して人々がどう考えたらどう感じているとか、何に喜んで何に悲しんでいるとか、まあ倫理的だね、そういう授業をやってくれて。

あと有名なジャーナリストで哲学科出身の人が何人かいて、ジャーナリズムっていう道は倫理とか哲学とかやっついても進めるんだなって思つちやつたところがある。

（藤田—それは学校とかではなくて？）

学校じゃなくて本とか読み始めますよね、本田勝一とか読み始めたとか、あの辺の部分で何かそういうのがあつたんですね。

で、英語が好きだったらたとえば国際関係とかやるんじゃないかってところは、その当時の：九〇年代半ばくらい？、国際なんか学部なんか学科っていうのが流行つたっていうのがあつて、無数にあつたっていうのがあつて、ちよつと個人的にはそれを選択するには迷つた。そう言ったときに、自分の中で、人生の中で、どっちをやった方が、その深く：豊かに生きていけるかな（笑）みたいになったら、職業選択のこともあつて倫理にしようってなつて、倫理学科に入ったところがありますね。倫理学専攻。

最終的に（大学を）卒業するときは、マスコミか国際協力の道かにしようと思つてました。で、

どっちかかっていったときに、国際協力っていう就職窓口で売るのがなかったんですね。たとえ文系の人が倫理学やりましたって言っても、なかなか窓口がないと思うんです。

で、結果的に私はテレビ関係の仕事に就いて、五年間海外に番組を販売する仕事をしていました。テレビ局で、五年間仕事をしつつ、たまたま国際局国際部っていう——それもまた海外とつながりがあるところなんだけれども——部署に入って、周りの社員はいわゆる報道とかを経験していたものだから、もちろん自分も報道関係のニュース番組というか——素材というんですかね——を目にしたりしてきて、海外の貧困の状況とかそういうのを見てきて、やっぱり自分は国際協力の仕事をしたいなと思い始めてしまったんですよ。

そう思ったときに、仕事時間の：会社の昼休みに、協力隊のホームページを見たんですよ。それで、「あつ、私でも村落開発普及員という職種で行けるんだ」って思ってた。みんな、お医者さんとか看護師さんとかしか行けると思ってなかったんで、で、応募して、あっさりボリビアって決まって、というのがあって、正直ボリビアという国は知らなかった。なんでかっていうと、アジアの貧困とか、やっぱり身近っていうと変だけど、情報がいっぱい入ってくるでしょ。で、南米っていうのはやっぱり遠い存在だから、本当にまったく知らなかった、後になって調べていくと何となく分かってきた。というのが、ボリビアに来るきっかけ。

2. 村落開発の協力隊員になって

藤田 — 「村落開発普及員」って、場合によってはそれこそ何をやればいいんだらうというのがあると思うんだよね。どうやって自分の仕事を見つけていったかというか、作っていったかというか、その辺の話を聞いてみたいです。

平柄 — そんな成功例でも何でもありませんけれども、本当は私の要請：「要請」っていうのが各隊員であがっていて、配属先からこういう人をお願いしますっていう細かいオーダーみたいなものがあるんですけど、そのときはUNDP（国連開発計画）がやっているJóvenes contra la pobreza（JCP）っていうプログラムが、その二〇〇二年とか二〇〇三年の時代にあったのね。で、確かそれはボリビアの若いプロフェッショナル、例えば建築家とか土木技師を各市役所に配属して、仕事をしつつ——まあOJiみたいな感じ？——、農村部の貧困に立ち向かうみたいなの、そういうプログラムがあったんですよ。

（藤田—協力隊がそれと連携しようというのがあったよね、あの時代に）

そう、特にPRSP（注二）とか援助協調をやっていた専門家の人がどうも要請をあげたらしくて、（藤田—吉田充さんでしょうか？）

そうそうそう、そうだったらしくて、それで入った、と。それでアルティプラノ（高地平原部）の市役所に何人か入って行って、私はたまたま遺跡のあるティワナクの市役所でした。

で、配属されたら、協力隊の派遣のプロセスにはあまり詳しくないですけど、要請から実際に派遣されるまで一年以上？二年くらい？かかったらうれしいのね。だから、行ってみたら、（JCCの）カウンターパートと言われる人はいなかった（笑）。で、「あれっ？」って思ってた、私もお気楽極楽なもんだから「あら、いない」ぐらいの

「じゃあ何しようか」ぐらいに自分で：、思えばその辺はICAが自由裁量にしてくれたところがあると思うんですね。多分今だったら、いないからじゃカウンターパートのいるところに配属先変更とか色々あるんだと思うんですけど、その辺はほんとおかげさまで自分で考えて：まあ線から外れない程度にね。

今思えば、そして今も当時の市役所の人とよく会うんだけど、橋を作ったり市の開発計画を立ててくれるボランティアが欲しかったらしい：今よく話したらだけれどね。けどそんな話もあり分らず、それこそ今までの私の経歴から別に開発学をやっているわけではないから、そんなアイディアも出て来ないわけで、「さてどうしようか」ってなったときに、周りの人と仲良くなることから始めて（笑）、村で日本人なんて初めてだったし、まあ一年弱くらいはどういう仕事をしたらいいか悶々としたところがありました。だけど市役所の人、それはもう本当に優しい方で、自由にさせてくれて、市役所のイベントとか市役所の会議とか、例えば村で何かのこういう調査があるとか、仕事の何かがあるっていうときには連れて行ってかれて、実情を見せてくれるっていうのが一年間そればかり。

で、二年目くらいになったときに、でも市役所とはなかなかうまく仕事ができなかったの、ちよつと外に出たら、女性グループがいて：というか女性たちがいたんですよ。自分たちはこういうことを：、たとえば手芸の教室とかで手芸を習いたいんだけど、織り物を習いたいんだけど、なかなかそういう機会がないとか。たとえば料理とか、そういう話があったんで、じゃあ簡単じゃないかっていう話で、みんなで集まって先生を呼んできて、講習を受ければいいんだよねっていう話になったときに、「ああやろう」ってなって、

一つのグループを作ることになりました。それで織り物の研修をしたりだとか、あと今度は子どもたちに環境教育をやるうっていう話になって、ほかの隊員がそういうの得意だったんで、ペットボトルでおもちゃ作ったりだとか。あとここポリビアってパンを主食にしているでしょ、だからパンを毎日買いに行くから、パンを買いに行く袋をみんまで：子どもたちで作ってゴミになる袋を減量するだとか。

あと一番大きかったのは、そのとき大衆参加法（注三）とかの話で、あのおときは *Asamblea Constituyente*（制憲議会）とか憲法を作る前の段階で、いろいろといういろいろなどで議論があったりして、でそこに住民が参加するような体制というか雰囲気があつて、でなんか各市とかで会議とかしなかった？

（藤田）それは *Diálogo Nacional*（「国民対話」と呼ばれる、PRSPを策定する前段階の作業として当時のポリビアで実施されていたもの）のこと？）

二〇〇五年だよ、ちようどそういうデモクラシ一的なこういう雰囲気か村まで達してきていて、その時だよね憲法改正とかやり出して…

（藤田）もう既に議論にはなっていたからね）

で私は：村の女性たちはそういう動きの中で、自分たちの権利とか憲法改正とかそういうものに対して、知りたいとかどういことが起きているのか勉強会をしたいっていう話になって、三日間くらいでティワナクのカトリカ大学を借りて、講師を呼んで、どこだったかな…CIPCA（ポリビアの有名な農村開発NGO）ではなかったと思うんだけど、NGOを呼んで勉強会をやったりとか、それでそこで女性たちがどうい権利をもつてい

るのかみたいな講習をやってもらったんです。私は自分ではできないから（笑）。

そんなことをしていて、最後の時期にそういうのがあったり、最後にグループをまとめて帰ろうと思っただんで、半年間延長させてもらって全部で二年半いたんです。

（藤田）具体的に組織を作ろうということ？）

そうそう、*Witay Marka*（*Pueblo Eterno*、「永遠の村」という意味のアイマラ語です）っていう女性グループを作って、彼女たちが自分たちで：生計向上まではいかなければ、自分たちで先生を呼んで：同じようなことですよ、自分たちがやりたい、学びたいと思っただことに対して企画して実施するっていう力があるようにってことで、最終的にまとめ、というのを。今の段階では数人のグループになってると思うんだけど、その（上述の）会議をやったときはだいたい村から六〇人くらい来てくれたりして、なかなか面白い仕事でした。

3. 日本に戻ってから外務省の草の根無償の仕事で再びポリビアに

平柄 — 協力隊は二〇〇三年の七月から二〇〇六年の：半年延長させていたで、二〇〇六年の一月までだったんですね。で、協力隊の経験もあって、自分のベースが倫理学とかだとやっぱりもうこの開発の分野では足りないなと身に染みしました。それはもうさつき話した、いきあたりばったりの…

（藤田）足りないっていうのは、実践的な部分でということが大きい？）

実践的な部分で使う理論、みたいな。たぶんそういう開発学とかを勉強していたら、もうちよつと上からマクロ的に見て戦略とか計画を立てたりとか、できるんじゃないかと、できたんじゃないかと。すごいいっぱい反省があつて、じゃあどうしようかと思っただときに、じゃあ開発学の大学院に行こうと思つて、けっこう思う人いますよね協力隊終わったら、まあ国はどこでもいいなと思つてました。

で、一月に帰って、それまでちよつと準備期間として仕事をしよう、アルバイトをしようと思つたときにちよつと、東京のJICAの本部の中南米部のアルバイトの募集がちよつとあつて、たまたま課題部でもなく地域部の方で、アジアでもなく中南米部の方で。たまたまスペイン語とかも：おかげさまで本当に協力隊のおかげでスペイン語が分かるようになったんですけど、たまたまそこに入つて、大学院を受けるのはだいたい日本でも次は〇月入学くらいなんで、まあそれまで準備して、いよう、半年一年ぐらい準備しよう、または大学院が日本だったら、アルバイトしながら行こうくらいに思っていたところだったんですね。

で、準備を始めようとしたところで、また数か月後にちよつと在ポリビア日本大使館の経済協力班の草の根無償を担当する職員っていうんで、すかね、草の根無償外部委嘱員っていうのがあつて、募集が出てました（注四）。どこで見たかっていうと、それは外務省のホームページを見て、そのときまで外務省（本省）が募集窓口になっていて、要は在外公館（が直接募集をかけるの）ではなくてということ、世界的に各公館で委嘱員が必要ですよという募集が年に二回くらい出ているのね、その年だか次の年までね。で、そこにポリビアであつたから、「あ、そうか、ポリビアに戻って、

を申請できる。

(藤田—基本的には地方自治体とNGOって思っ
ていればいいんだっけね。)

その通りです。小さなプロジェクト、日本円で
言うところ一千万円以下のプロジェクトですよ、そ
れを直接日本政府に申請できるわけですよ。政
府間同士のものではなくてという、なかなか面白
くないですか。だから、我々がその人たちか
ら直接話を聞いて、直接現地に行つて、本当にニ
ーズがあると思つたら、日本人の一人としてそこ
に学校を建てることのできるという。

(藤田—実際に現場まで行くんだよね?)

事前にも行くし、やったあとのフォローアップ、
どうなってるのかも見に行っているし。まあそう
いう仕事。申請を受けて、現地調査をして、その
ニーズを見て、日本政府に上げて、実施して。

すごく思うのは、政府間とかだとなかなか自分
で実感するような仕事にはならなくて、それより
もこの仕事は直接住民レベルだから、直接実感が
あると思う。何が必要で、自分たちで調査してつ
ていう、実感があると思うんですよ。そういう
ことをやりました。

今思えば、本当に現地職員でやっている人もい
て、現地職員と一緒に働くわけだね。自分とそ
の当時は実質的にはあと二人、三人の人とチーム
を作つてやっていて、本当に現地の職員の人と、
職場も現地の人と働いていう。スペイン語の環
境で。それもすべて現地に近いつていう仕事でし
たね。

(この後、ボリビアで修士課程の勉強をして、
JICAボリビア事務所の現地職員になり、そして自
分の辿つて来た道を振り返つてみてという話が
続きます。

それが二〇〇六年八月からでしたので、半年後
にはもう戻ってきました。で、大使館で仕事をし
て、たまたまそのときは次の人が多分いなかった
とかで、そこから二年と年度末(二〇〇八年三月
末)までだったので、二年七か月くらいいたのか
な。

そこで、まあいわゆるご存知の通りの草の根無
償の申請を受け取つて、実施をして、フォローア
ップまでするっていう仕事をずっと…。草の無償
っていうのは、在外公館で毎年何件実施するつて
決まってるんですよ。で、その件数に基づいて、
まあ申請が何百件と年によっては来ますと。で、
申請つて何かつて言つたら、学校を作りたいとか
病院に機材を入れたいとか、いわゆる(中央)政
府レベルでの要求ではなくつて、住民レベルに近
い病院だとか村役場だとかが直接プロジェクト

(注一) ボリビア・カトリカ大学客員研究員。

Blog: <http://chukiyawunkiritwa.blogspot.com>;

Twitter: <http://www.twitter.com/mfujita1023>。

(注二) 貧困削減戦略文書、Poverty Reduction
Strategy Paper。この文書を各国政府が策定し、それ
に基づいて国際援助が供与されてきました。ボリビ
アの場合は、その前提となる市民各層との対話を法
律を定めて大々的にやったことにもその特徴があ
り、それが下に出てくる「二〇〇〇年のウゴ・バン
セル政権下での実施に続いて、二〇〇四年のカルロ
ス・メサ政権下で二度目の実施になりました。

(注三) Ley de Participación Popular。一九九四年に
施行された地方分権を定める法律です。一九九〇年
代中盤の諸改革の流れと、二〇〇〇年代の(天然資
源管理の強化と)憲法改正に向かつていく政治的な
動きが混ざり合いながら、そこに「対話」を重視す
る雰囲気醸成されていたことが、この部分の話か
ら伺えます。

(注四) 外務省のホームページによれば、「草の
根・人間の安全保障無償資金協力」外部委嘱員、と
いう名前になっているようです。

『ペルー・鵜とともに暮らす』③

古谷桂信

プンタ・サンファンでの話の前に、ずいぶん様変わりしたペルーの印象を少し書いておく。

イロの町から、プンタ・サンファンに向かう途中で、ホテルが取れたのは、ナスカの町だった。地上絵で有名なナスカから、プンタ・サンファンまでは一時間半ほどだ。

ナスカに着いたのは、日付が変わった午前0時前で、遅い夕食を食べに町に出た。開いていたのは、ニワトリの丸焼き屋だけで、二十五年振りにポーヨ・アラ・ブラッサ（ニワトリの丸焼き）を食べた。今回のペルー旅では、美味しいものばかり食べている。井上さんが紹介してくれる店が美味しい店ばかりで、それが値段も安い。そして、量が多い。私引量が多いというくらいですので、そのボリュームは想像できるでしょう。「ちよつと飲みましょうか」と言いながら結局、毎日、美味しいビールをいただいでしまった。おかげで、かなり腹周りが苦しくなってきた。

二十五年前、一九八六年にペルーに来た時とは、食べ物印象だけでなく、町の雰囲気も大違いで、昔は陰鬱に見えたりマの町は、現在は物も豊富で明

るく、美味しい食べ物に溢れた街になっていた。街は、大統領選挙の選挙運動の佳境で、フジモリ元大統領の娘、ケイコは、三番手と目されていた。「なんで、フジモリの娘が、それほど、支持を集めているのか」不思議でならなかったが、井上さんによると「フジモリは、『ともかく内戦の混乱を收拾した』ということ、一般庶民からは、今でも人気がある」とのこと。日本で、見聞きするだけの報道ではわからないものだ。結局、ケイコは二位に着け、決選投票にまで進んだのだから、井上さん説は、裏付けられた。それから、華やかな選挙戦模様を伝える面白いネタは、身長二〇mほどの候補者写真を切り抜いたポスターというか、ウルトラマンくらいの巨像が、高速道路沿いに並ぶ光景だろう。ケイコの場合はバストショットで、オルメカ文明の巨大頭像のような巨大な顔が高速沿いに建てられていた。迫力は一番あった。両面印刷（ポスター貼り合わせ）の巨人も多い。金がかかっているというか、候補者数も多いので、ともかく賑やかな選挙戦だ。中米の選挙事情ともまた違った興味深い選挙戦だった。

プンタ・サンファンには、二十八日の九時半頃に着いた。ここは、取材許可は取れていたが、現場の作業員からの直接の返信は、井上さんのところにも帰ってきていなかった。少々、心配しながら向かったが、鳥類学者のマルコ・カルディーニャと島守の

メルチョル・ジカが出迎えてくれた。マルコの話だ。



▲ プンタ・サンファン（サンファン岬）
沿岸は砂漠そのもので、草や木は見当たらない。

【マルコ】

ここには、ウミウ（コルモラン種）が、親鳥二十八万七、二八〇羽、ヒナが十八万七、九二〇羽で、合計四七万五、二〇〇羽がいます。ウミウ以外では、ピケーロ（カツオドリ）が一四、九四〇羽、ペリカインが七、五六〇羽います。ここでは、ウミウは、過去三年間は、繁殖が失敗しました。今年は、アンチヨビが海岸近くに接近し、ウミウにとつていい状況が続いています。ウミウが吐き出すボール状のもの

を調べると、食べたものがわかるのですが、今年は、一〇〇%アンチヨビでした。おかげで、今年の卵のふ化率は、ほぼ一〇〇%でした。

どうやって、鳥の数を調べているかというところ、何方か地点を決めて、一m²の面積内の巣の数を数えます。巣が、三つあれば、ヒナと親鳥を含めてそこに一〇羽くらいがいることになりす。その平均と、面積を掛けあわせて、総数をはじき出します。ヒナは、巣の周りにフンをしますので、丸い円状に巣の跡が残るのです(二〇日くらいで終了します。今、大きくなったヒナは、泳ぎの練習を始めています。

ここでは、二〇〇七年に採集し、その後とは違っていません。アグロルーラルは、そろそろ取りたいと考えていますね。アグロルーラルは農民から要望されていますから比較的採集に熱心です。環境省の方は、鳥の数がを増えることを目的にしていますから、採集には慎重です。でも、いっただけ取るとか決めるのは、今は環境省ですからね。」

マルコは環境省の委託調査をしていて、所属はカジェターノ大学だった。所要があると、一時間ほどの対応で、出かけて行き、この後は、島守のメルチョル・ジカが対応してくれた。

オフィスから遙か キロほど先に鳥の群れが見

える。メルチョルが提案してくれた。

「鳥の近くで撮影したいですか？」

「できることならしたいですが」と私。

「ちょうど、昨年末、ナショナルジオグラフィックが製作し、置いていってくれた観察小屋があるから、あなたたちはそれを使えばいいよ。環境省もこの小屋のことは、まだ知らないんですよ」

ベニヤ板と角材で造られた畳一畳ほどの小屋と、いうか、箱が事務所の向かいに置いてあった。一方の面だけ緑のフェルトのような素材で、カーテン状に幕が下りている。

「こっちのフランスの取材陣が造ったものもあるけれど、ちよつと小さいんだ」とメルチョル。

前にメルチョル、私が後ろで、箱を持ちあげる。その間に通訳の井上さんを挟む体制だ。牧野さんは、待機だ。二〇mほど、ゆっくり進んでは、止まる。何度もそれを繰り返す。

「ウミウを驚かさないように、ゆっくりゆっくりな」とのメルチョルの指示だ。

「もう群れに入ったよ」

あの四七万羽の群れの中に、本当に入ったのだろうかと思っていたら、後ろの幕の隙間から、ウミウの姿が見えた。あの群れのまっ只中に入ったんだ。

「もし、今、この箱から誰かが出たら、すべての親鳥が一斉に飛び立つよ。そしたら繁殖もお終いだよ。もう少し進もうか」というメルチョルの言葉にさらに進む。

そうすると箱を持って歩いている間に、後ろの幕から、ヒナが箱の中に入りこんできた。持ち上げて進もうとしても、持ち上げた横から、次々とヒナが入ってきて歩きにくくなってきた。

「じゃあ、この辺で反転しようか」とのメルチョルの指示で、箱を転回させ、後面が前を向くようにした。ウミウの大群の只中に、我々はいた。望遠レンズは必要ないくらいの距離だ。一m以内にも何羽ものヒナがいる。ただ、親鳥は、ヒナほど近くには寄ってこない。まず、広角レンズで近距離と、遠景を撮る。次に標準ズームで、ウミウの全身を何種類か抑える。あとは、望遠で、ウミウ(コルモラン種)の個性まで感じられるくらい鳥の表情に焦点を当て撮って撮って撮りまくる。この時のために数カ月

前から、準備してきたんだ。牧野さんたち琵琶湖博物館にとつては、数年がかりの企画に海外の比較軸をもたらすことができるかどうかは、この写真にかかっている。これほど、明確に撮りがいを感じ、また、絵的にも面白い撮影はめったにない。



▲ ウミウのアップ
円らな瞳が印象的。羽の質感まで分かる。

この他に撮りたいのは、群れの中に突っ込み四七万羽に取り囲まれたこの観察小屋だ。でも、自分ではその撮影は無理だ。牧野さんが自分のカメラで撮っていてくれることを期待する。

メルチョル・ジカも、プンタ・コーレスの島守のフェリペと同じように、鳥を保護していく仕事に誇りを持ってあたり、我々の調査にも、全面的に協力してくれた。

「牧野さん、観察小屋が群れに突っ込んでいくところ、見てましたか。写真は撮ってくれてますよね。」と尋ねると

「いやー、ヒナの泳ぎの練習を見に行こうと誘われたんで、そっちにすぐ行ったから見てなかったよ。撮ってもいいない。あ、必要だった？」との残念な返事だった。

翌日、三月一日、ナスカ近郊のパルパ郡ジパタ町で、グアノを使用している方からその使用法と、効果のほどを聞かせてもらった。この地区のグアノの販売係を兼ねている農民、綿花、野菜、果樹を育てているホセ・アギーレさんだ。ホセさんによると、「栽培法をグアノを使うようになって、完全有機栽培に切り替えた。化学肥料は、窒素やリン、亜鉛など、それぞれ別を買わないといけない。グアノだったらそれだけでいい。化学肥料は、合計したら、グアノの何倍もするんだよ。しかも、グアノに替えて収穫量も1.5倍から2.0倍に伸び、農地の土自体が健康で豊になった」という。

グアノの使用法を、パジャール豆(インゲン豆の一種)の畑で見せてくれたホセさんの友人、ハコボ・マヌブラさんも、「俺たちは、グアノ中毒だ。グア

ノなしでは農業はできない」というほど、グアノの魅力に取りつかれていた。豆の苗の根元に一つかみのグアノをまき、土をかけて行く。植え付け時にもまき、苗が大きくなり、花が咲き実を付ける直前にまくことが効果的だという。

ホセさんによると、「もっと販売してほしいが、割り当ては使用希望量にとても届かない。需要に供給量があっていない。それで、しかたなく牛フンと堆肥でグアノの代替の有機肥料をつくっているよ」とその肥料を見せてくれた。ホセさんの果樹園は、下草も豊で、果樹は、数珠つながりにたわわに実っていた。

最後に、ホセさんがグアノをもちいて育てたマンガーを、一人一個ずつ頂いた。小ぶりの種類で、淡いクリーム色のマンガーは、ものすごく濃厚で鮮烈な甘さの絶品だった。

連載第三九回 『ラ米百景』

伊高浩昭(ジャーナリスト)

第58景

キューバの恋人

東京・新宿で二〇一一年九月半ば開かれた「第八回ラテンビート映画祭」の最初の上映作品は、一九六八年に制作された黒木和雄監督の日玖合作「キューバの恋人」だった。私は六月、この作品が上映されるのを知り、懐かしさがこみ上げてきた。懐かしい。なんて懐かしいのだろう。時代的郷愁とでも言うべきか。この映画が撮影された六八年、私はメキシコ市を拠点に取材・報道を続けていたが、飛行機で二時間あまりのキューバに行くことができなかつた。東西冷戦の真っ直中、とくにヴェトナム戦争が激化しつつあった当時、「米国の手先」と見抜かれていた日本ないし日本人の記者である私には、取材査証がなかなかおり

なかつたのだ。

そのため私はメキシコ市でキューバに行く人、キューバから戻ってきた人をつかまえては情報をとっていた。国籍は構わず、ジャーナリスト、外交官、政治家、芸術家、スポーツ選手、旅行者と誰にも接触した。六八年はメキシコ五輪の年で、東京メキシコ市ハバナを往復する日本人も増えていた。そんなある日、三七歳だった黒木和雄監督(一九三〇～二〇〇六)に会った。私は二五歳の駆け出し記者だった。

監督が夜の大都会メキシコ市に耽溺したいと言うので、場末の安キャバレーから酒場へと何軒もはしごをかけ、そろって泥酔した。午前三時ごろか、国立芸術殿堂パラシオ・デ・ベジャス・アルテスや中央郵便局に近い中心街ドンセレス通りの私のアパートに戻ると、建物の入り口の扉は無情にも閉まっていた。夜の下町は危険極まりない。とっさに隣

のマノーロ・ファブレガス劇場の建物に入り、壁の扉を開けると階段が上部に続いている。千鳥足で到達した屋上は、私のアパートの屋上と同じ高さだった。屋上から私の部屋のある階に容易に降りられるのは熟知していた。だが二つの建物の屋上の間には幅一メートル近い深い谷間があり、これを飛び越えなければならなかつた。

「私たちは泥酔していますが、監督、飛び越えますか」「覚悟して飛び越えましょう」「私は飛び越えた。この一夜の冒険で、同志的紐帯ができた。三十三年後、私たちは東京で、このエピソードを語り合った。

主演の津川雅彦にもメキシコ市で会った。当時二八歳で、この映画の主人公「アキラ」そのままの、水もしたたる美男子だった。映画の物語は、津川扮する船員がハバナの中心街でガールハントする場面から始まるが、津川は私に、いかに自分がもてるかという現実の話も長々と聞かせた。アキラは葉巻工場で働く美貌のマルシア(ジェリー・プラセンシア)に一目惚れし、彼女を追いかけてキューバ島東端に近いサンティアゴまで旅をする。

その年六八年の「革命年」の名称は、前年ボリビアで死んだチェ・ゲバラを讃える「英雄的ゲリラの年」で、ゲバラの「ボリビア日記」が広く読まれていた。革命軍を補完する志操堅固な民兵でもあるマルシアはアキラに、この日記を贈る。物語はアキラの「革命性」を試すかのように会っては離れる彼女と、追いかけるアキラを軸に展開する。だが、米政府が仕立てた六一年四月のコチーノス湾ヒロン浜の侵攻事件、ゲバラの国連演説やカストロの演説(六八年七月二六日モンカダ兵営襲撃記念日演説)など史実の映像が随所に挿入され、半ばドキュメンタリーのような様相となる。

政治的無関心派を指す「ノンポリ」という言葉が当時はやっていた。キューバ革命に無関心で、さしずめ「ノンレボ」とも呼ぶべきアキラは、革命社会の実情を何となく理解するようになる。マルシアはアキラと結ばれた夜が明けると去っていく、サンティアゴで再会したが、決然と別れを告げ、以後アキラの前に姿を現すことはなかった。

圧巻は、家族に会いたいと望むアキラを、マルシアが故郷サンティアゴの墓地の、家族全員が眠る墓に案内する場面だ。

家族はみな、革命に殉じて死んでいた。「キューバの恋人」とは、マルシアが象徴する革命だった。私は、そう解釈した。

映画祭に「キューバの恋人」を観に行ったのは、主演だった津川雅彦が上映後に撮影時のエピソードを語るひと時が設けられていたからだ。私は終映間近に館内に入り、津川の登場に備えた。映画が終わり明りがつくと、観客席から津川が現れ、開口一番、「暗闇からこの明るい場所に出てきたくはなかった。当時、私はそれなりの美貌でしたから」と言った。映画の中の津川とは四三年間の隔たりがあった。老獪な老人役が売り物の今の津川の風貌からは想像しがたい「アキラ」なのだ。

私は挙手し、質問した。当時メキシコ市で黒木監督と津川に会ったことを伝えてから、「マルシア、つまり恋人は革命そのものではなかったか」と訊いた。津川は、「まさにおっしゃるとおりです」と答え、あとは何も語らなかつた。私はさらに、「この映画は、長いあなたの俳優人生の中でどう位置づけられるか」と訊ねた。すると、「俳優人生とか、位置づけとか、考えたことはありません」という答えが返ってきた。私がかっかりした。

これが第三世界や欧米の俳優ならば、政治的、文化的、思想的な答えが返ってくるものだ。日本の大方の俳優は女優も含めて、どうして明確な意見を持たないのだろう。あらためて、がっかりした。結局、がっかりするのを想定しながら、がっかりしたというのが、新宿まで出かけた収穫だった。津川は他の質問に答えて、自分が「日本人離れたナンパのできるアキラ役をどうつくったか」とか「実際にキューバ人女性と仲良くなった」など、得意の女性談義をしたり、カストロの指導者としての存在感について触れていた。

近く後日談をまとめた「アキラの恋人」という映画ができるという。あの革命万能の時代と、市場原理を導入した今日のキューバとの違いが新作にどう描かれるのか、私の関心はそこにある。

一〇月八日発売の月刊誌『世界』十一月号に、伊高浩昭インタビュー「アレイダ・ゲバラ―広島・長崎・福島を語る」が掲載されました。

音楽三昧♪ペルーな日々(第42回) 「ジャズの世界を切り開く人々」

さて、今回は門外漢ながら、ペルーのジャズ・シーンについて少しご紹介してみたいと思う。はじめに断っておくが、僕はジャズに関してにはつきり言って(残念ながら)素人であるので、

もしかしたらどこかおかしいことを書いていることもあるかもしれないが、その辺りはご笑覧いただけたらと思う。

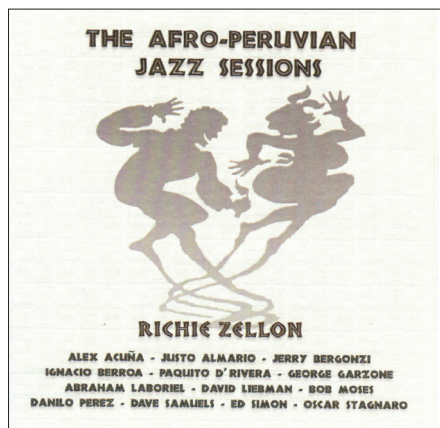
とは言え、ペルーのジャズをそうまでして取り上げようと思ったのは、ペルー発のジャズの面白い試みが日本などではあまり知られていないためである。これを機会に少しでもペルーのジャズというマイナーながら面白いジャンルに興味を持っていただけたらと思う。

ジャズは、実はその成立からラテン文化が深く関わってきた。ニューオリンズはそもそもフランス領時代の文化を色濃く残していたし、初期の「黒人」とされる演奏家には、多くのカリブ系「黒人」が混ざっていた。そういった流れもあり、アフロ・キューバン・ジャズが、かなり早い年代からジャズの世界において重要な一翼を担ったのは不思議ではない。リズム色をより前面に押し出したこうしたラテン・ジャズは、多くのジャズ演奏家や愛好者を魅了してきた。

こうしたラテン・ジャズが意味してきた「カリブ的ジャズ」に対して、近年、南アメリカから新たな試みが生まれてきている。サウスアメリカン・ジャズと言われたりもするこの新しい実践は、アルゼンチンとペルーがその重要な推進役となっているようだ。アルゼンチンでは、チャカレーラなどのガウチョ(カウボーイ)文化がその中核となっているのに対し、ペルーでは主にアフロペルー音楽をベースにジャズを展開していると言える。

国内でも大きな影響力を持ち、かつ国際的な評価も高いペルーのジャズ演奏家にハイメ・デルガード・アパリシオがいる。彼はペルー国内でジャズの音楽家の育成に務めたピアニストだ。またペルーで一時代を築いたレコード・レーベル、ソノラディオのプロデューサーとしても活躍した。アメリカで学んだジャズのイロハをペルー国内に根付かせ、多くの新しいジャズ世代を生み出したという意味でも大きな功績がある。

また、アメリカで「ラテン・ジャズ」の打楽器奏者として常にトップを走り続けたペルー人ジャズ・パーカッショニストに、アレックス・アクーニャがいる。若くしてリマで頭角を現した後、十八歳



でペレス・プラーダの楽団に入り、その後ブルト・リコへ移住した。一九七四年にアメリカ西海岸に移ると、エルヴィス・プレスリーやダイアナ・ロス等と共演、また大きな影響力を持ったジャズバンド、ウエザー・リポートにも参加した。その後も数多くのスターと共演している。また彼は、リッチー・セロンやジェアン・ピエール・マグネトらとも共演するなどペルーにおけるジャズシーンにも大きな影響を与えている。

こうした国際的評価も高いジャズ演奏家が積み上げてきた流れの中から、ペルー独自の音楽文化をジャズと積極的に融合させていく試みが次第に生まれていった。そしてその流れをクリオーヤ音楽の方から準備したとも言えるのが、唯一無二のシンガーソングライターであったチャブーカ・グラランダとその周辺の音楽家たちを中心とする演奏家たちだ。その両者の流れを汲んで八〇年頃より顕在化していった新しい時代の演奏家たちの一部を以下で紹介したい。

リッチー・セロンは、ペルーのサウスアメリカン・ジャズの最重要人物の一人だ。八二年にいち早くアフロペルー音楽とジャズをフュージョンさせたジャズアルバム「ランドロヒア」を発表し、九〇年代半ばにはソングサウルスというサウスアメリカン・ジャズのレーベルを立ち上げ二〇以上の

アルバムをプロデュースするなど、まさに最前線を走る開拓者でもある。ギターによるアフロペルー・ジャズⅡ前ページ写真Ⅱを中心に、クンビアやタンゴ、バジエナートやメレンゲなどペルー以外のローカル音楽もどんどん取り込んでいくそのあくなき挑戦と遊び、心が素晴らしい。彼のソングサウルスからも、気鋭のペルー発のジャズ演奏家たちの作品を聴くことができる。

サックス奏者のジェアン・ピエール・マグネトは、ジャズのみならずロックやフュージョンまでさまざまなジャンルの音楽で活躍するマルチな側面を持ちつつも、ペルーにおいて多くのジャズ演奏家を育てたジャズの殿堂とも言えるペーニャ(ライブハウス)「サツチモ」を立ち上げ、ジャズ・フェスティバルの企画するなど、大きな役割を担ってきた。また彼自身もアフロペルーやアンデス音楽を取り込んだジャズの可能性を模索したクアルテット、ペルー・ジャズ



Ⅱ写真上Ⅱのメンバーの一人でもある。このペルー・ジャズは八四年に結成されたクアルテットで、サックスとキーボードのマグネトに加え、ペー

スのダビ・ピント、ドラムのマノンゴ・ムヒカ、パーカッションの故プリオ・チョコラテ・

アルヘンドネスで構成されている(現在はパーカッションのメンバーは変わっている)。彼らは、ワイノやマリネラ、フェステホなどさまざまなペルー音楽をジャズとぶつけた意欲的な作品を多く生み出している。特に、

ペルーのアンデス音楽をジャズと融合させたグループはまだそれほど多くなく、非常に重要な試みを行っているクアルテット

であると言える。ちなみに今年の9月にはマグネトがアレックス・アクーニャらと共に結成しているアンデス・フュージョン・バンド「セレナータ・デ・ロス・アンデス」がビーンズ・レコードから日本版の発売となっている。ジャズではないが、ワンカヨのオルケスタ・ティピカ形式を発展させた新たなアンデス音楽の試みなので、機会があれば聴いてみてほしい。

さて、話をジャズに戻して、あと二名ほど今度はジャズ・シンガーを紹介したい。

数年前に「ジャズ・コン・サポール・ペルアノ(ペルー風味のジャズ)」というアルバムが日本でも紹介されたピラル・デ・ラ・オスⅡ写真下Ⅱは、ボッサとジャズをアフロペルーと融合させて歌う気鋭の女性シンガーだ。ピアニストの家系に生まれ、音楽に囲まれて育ちながらも、特に音楽教育は受けな

り歌手活動を本格化させ、徐々に独自のスタイルを創り上げていった。もともとボッサ・ノー

バのクリオーヤ音楽への影響はかなり早い段階から入ってはいたが、彼女の自由なその演奏は、これまでの積み重ねを受けて非常に素晴らしい音楽へと結晶したと言えるだろう。



そしてもう一人の女性ジャズ・シンガーとしてコリーナ・バルトラを紹介したい。彼女はニューヨークで活躍するペルー人ジャズ・シンガーで、アフロペルー音楽やチャブーカを中心にジャズに取り込みながら活動している。ピラル・デ・ラ・オスとは違ってブラジル色は薄く、また違った可能性を感じさせてくれる歌手だ。

ちなみにこの度ペルーの文部大臣となったサナ・バカのバックで演奏する演奏家にはジャズも演奏する者が多く、ペルー・ジャズやピラル・デ・ラ・オスなどのクレジットでも出逢うことができる。このあたりにも彼女のアルバムが海外で高い評価を得ている秘密の一端があるとも考えられる。ジャズのテイストを織り込んだアフロペルーの歌手としてのスサナ・バカの魅力は、チャブーカ・グラランダが拓いた新たなクリオーヤ音楽の地平の向こうを、彼らは一歩ずつ切り開いて行っているのだと言えるだろう。

(水口 良樹)

干しえびのピラフ

ARROZ CON CAMARONES SECOS



●材料（4人分）

- ・コメ 4人分
- ・皮を剥いた干しエビ 250グラム
（頭や殻、足も除いたもの）
- ・タマネギ中 4分の1
- ・トマト中 2個
- ・ニンニクペースト 小さじ1杯
- ・サフラン 8枚
- ・塩・粉末の白こしょう お好み
- ・レモン1個
- ・オリーブ油 大さじ2杯

●作り方

- 1) 干しエビを水に約3時間つけてもどす。水は捨てる。
- 2) 米を洗う
- 3) サフランをコップに入れて、4分の3ほどの水でもどす。水が黄色くなるのを確かめる。この水は米を炊くときに使う。
- 4) トマトとタマネギを細かく刻む。
- 5) オリーブオイルで、トマトとタマネギ、ニンニク、エビをいためて塩こしょうで味をつける。
- 6) 火が通ったらコンロの火を弱めて米を加え、弱火で1分間ほどいためる。材料がよく混ざるようにする。
- 7) サフランをもどした水を、サフランの花びらといっしょに加える。水を継ぎ足して、塩で味を整える。フライパンにふたをして、弱火でたく。焦げないように気をつける。水が足りなければ米がやわらかくなるまで少しずつ足す。
- 8) 皿に盛りつけ、薄切りにしたレモンをしぼる。薄く細く切ったハレペーニョやアボガド、メキシカンソースなどを添えるとさらにメキシコ風になる。

今回は干しえびを使った料理です。干しえびは、メキシコの多くの州でよく利用されています。ミチョアカン州では、皮をむいたエビをベースにスープをつくり、ユカタンでもさまざまな料理に使います。ユカタン半島などのマヤ人ははるか昔から、メキシコの多くの古代の文明と同様、料理の食材として干しえびを使ってきました。

私が子どものころ、夏休みにおぼの

別荘に行くと、兄弟や従兄弟としょっちゅう塩水湖にでかけて、細かい網で中小のエビをとりました。ときには一週間で四、五キロとったこともありました。

これらのエビの一部は、殻と頭と足を取り除き、太陽で干しておいて、料理に使いました。ご存知の通り、太陽の光で乾燥するとエビはずっと小さくなり、味や香りは濃厚でやわらかく繊細になります。栄養もいっそう豊かに

なります。

中国や韓国などアジアでも、干しえびはさまざまなすばらしい料理の材料となつていきます。

ミゲル・アクーニャ メキシコで
中学・高校の英語教師をしたあと、
1989年に来日。「FM COCORO」でD
Jをつとめた。現在、大阪の下町・天
満で「メリダスペイン語教室」(<http://www.merida-mex.com>)を主宰。

《民芸品事業提案書》

佐々木玲子

グアテマラ支援充実のため、民芸品販売事業を開始して約一年が経とうとしています。2010年度の売上は¥366,620と、総収入の28.5%を占めています。いっそうの増収のための提案書を作成しましたので、投稿させていただきます。

①通信販売

本案は、ウェブの活用を柱としています。既存のインフラが利用できるで初期コストがかからず、会員の情報共有が容易になり、在庫管理の手間も軽減できるためです。実際には、まずレコムのホームページに(用)加え、中南米情報ブログと民芸品通信販売サイトを作成します。中南米に関する情報(例…旅行、コーヒー、書籍など)を求めるユーザーがブログを訪れ、そこから通販サイト、HPに辿り着くようにします【図1】。

要約すれば、SEO (Search Engine Optimization、検索エンジン最適化)の実践です。実店舗と違い、通販の場合は利用者は欲しいものを探すときに検索エンジン(Yahoo!、Googleなど)を使います。つまり、利用者が検索バーに「レコム 民芸品通販」と入力しない限り、当方の通販サイトには辿りつけないからです。ちなみにGoogleの場合「中南米 民芸品通販」で検索すると、999,000件がヒットします。

レコムの団体名もグアテマラという国名もインターネット利用者人口に比べると知名度が高いとは言えないので、SEOの努力は不可欠です。

①-a 経過

現在、民芸品通販サイトはカラーミーショップ (<http://admin.shop-pro.jp/>) のサービスを利用して作成中です。仮称は「G」です。試験段階のため一般公開はしておりませんが、2011年12月には全商品の登録を終える予定です。ブログは、私がアメバブログ (<http://ameblo.jp/>) に起業をテーマに運営中のものであるので、これを編集して使うことができます。



▲民芸品通販店 G&J のロゴマーク(案)です。Guatemala Japan、私たちが協力して、平和の花が咲きますように、という願いを込めました。

①-b 課題

現状と課題は【図2】にまとめました。集客効果は未知数ですが、マーケティング自体レコムにとっては初の試みであり、通販なら撤退リスクも少ないので実施してみてもどうかと考えます。ただし、試行錯誤には時間の制限を意識した方が良く、今後のこれまでの仕事のペースを考え、今後

約一年間のタイムスケジュールを【図3】のように想定しています。

②対面販売

一方、従来の対面販売も継続します。現在はグローバルフェスタ(東京、毎年10月)ならびにワンワールドフェスティバル(大阪・毎年11月)の国際交流イベント、カトリック教会のチャリティーバザー、スピーキングツアーの講演会場で行っていきます。会員の知人に依頼する機会も増えています。民族雑貨、フェアトレード、手工芸品、社会貢献に興味のある個人・団体をご存じでしたらご紹介ください。民芸品サンプル持参で説明に上がります。

③おわりに

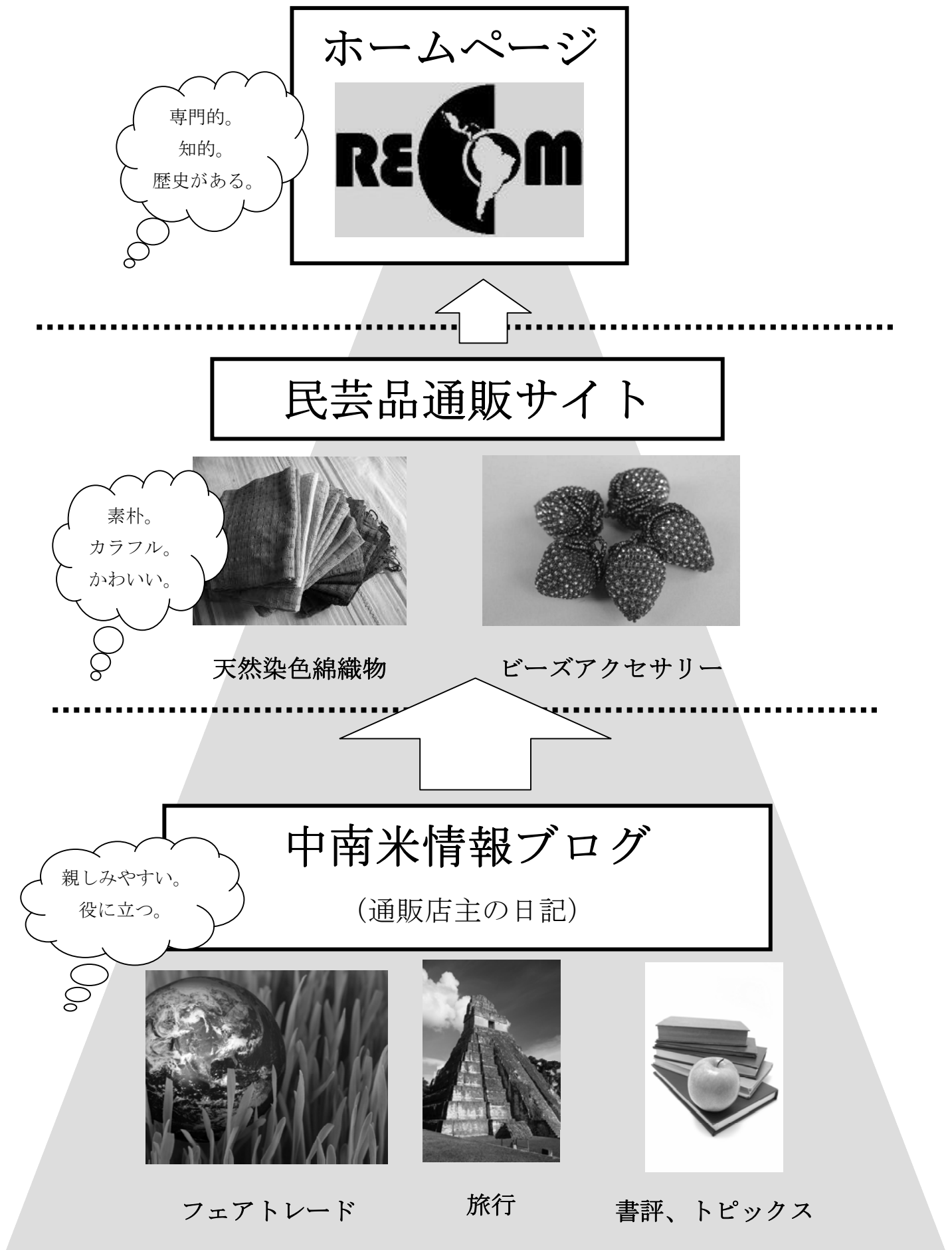
通信・対面ともに顧客データと売上の分析を行い、戦略に反映させていくことが重要です。私は、最終的には民芸品関連業務を有償化したいと考えているので、ラインナップの多品目化、リピート商材(ある時点での購入と次回の購入との間の時間が短く、反復がある商品。コーヒーが代表例)の導入などが必要になるかと推測しています。最近、一人で先へ先へと考えすぎでは無い気もしていますので、みなさんのご意見・ご感想をいただけましたら幸いです。

〈民芸品係連絡先〉

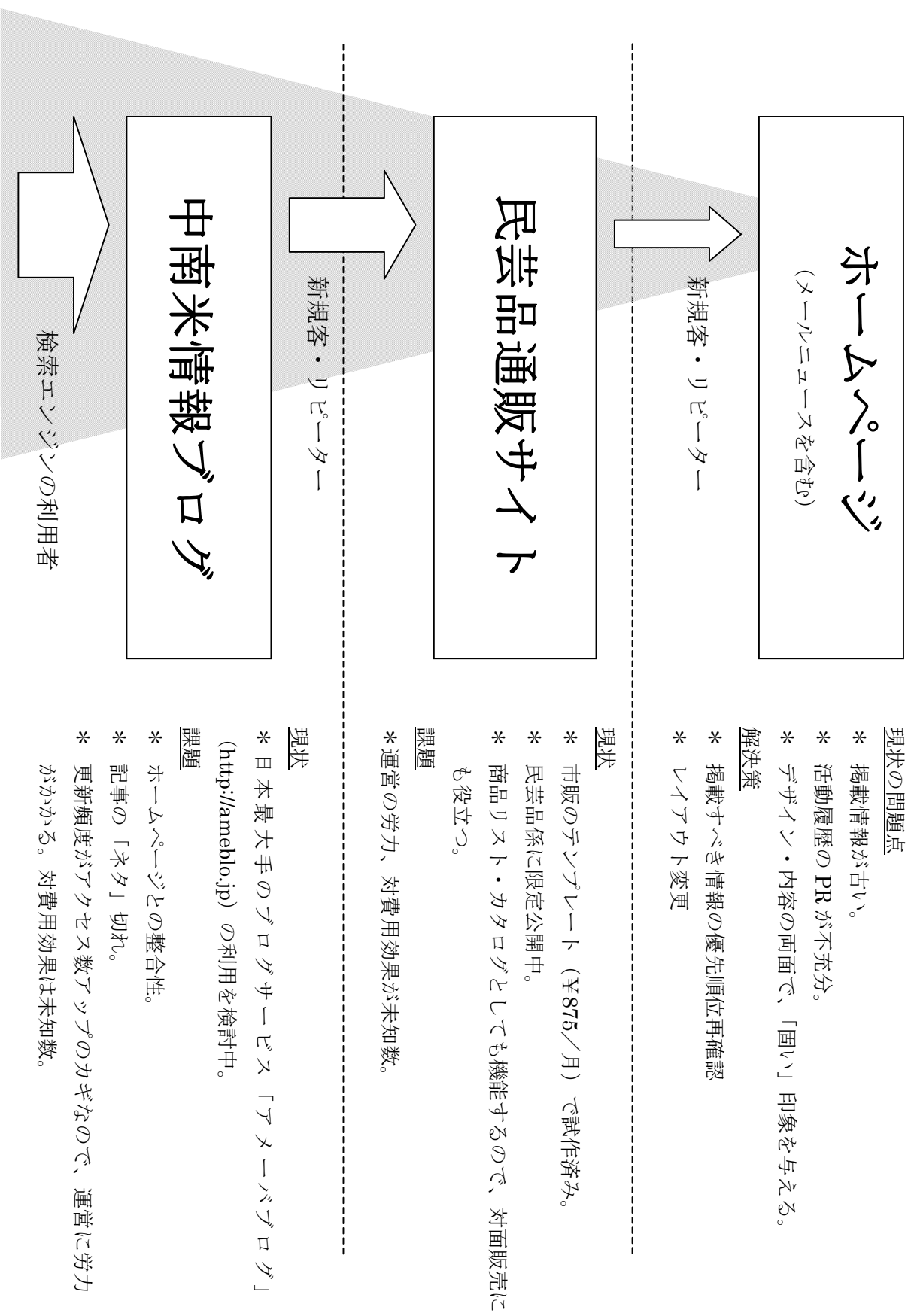
携帯:090-3872-0171

E-mail:z5c3k_n5q61@hotmail.com

ブログ:<http://ameblo.jp/leicoenaccion>



【図 1 . SEO 概念図】



【図 2. 現状と課題】

段階	内容	2011 ~12	2012												
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
共通	a)会の情報網の再構築 b)理念を親しみやすく表現する c)ゲアテマラの知名度アップ d)ゲアテマラと日本との関係をPR e)対面販売の継続 f)手工芸愛好家への商品PR※	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
通販	a)在庫の登録完了 b)全商品写真の撮影 c)アクセス解析 d)カタログ作成、対面販売に応用	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
HP	活動実績を強調するレイアウト変更	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
ブログ	a)コンテンツ決定 b)情報提供者を獲得 c)開設 d)リンク先を開拓 e)アクセス解析	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
その他	a)商品取り扱い量拡大・多品目化 b)民芸品業務の一部を有償化 c)リピート商材の導入	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

▲ 仕入

▲ 仕入

2013年1月以降?

※PR対象者は未定

【図 3. タイムスケジュール】

☆ ニューズクリップ



【ボリビア】

モラレス大統領、道路建設をめぐる先住民族と乖離

エボ・モラレス大統領は先住民族であることやエコロジストであることを誇りとしているが、環境問題では先住民族と対立している。インドロ・セクレ国立公園(ティプニス)やイシポロ地域の先住民族数千人が、国立公園の中心を貫通する道路建設に抗議するため、首都ラパスに向けてデモ行進した。専門機関の調査によれば、この道路計画によって、森林全体の43%に相当する61万ヘクタールの森林が失われることになるという。

この地帯にはチマネ、ユラカレ、メシエニヨなど64の先住民族共同体がある。先住民族の生活は破壊され、移住が引き起こされだろうと危惧されている。国立公園には数百種類の動物や植物が生息し、絶滅の危機にある樹木もあり、それらは違法伐採で国際市場で高値で取引されている。モラレス大統領は昨年12月にメキシコ・カンクンで開催された気候変動会議での合意に反対して、エコサイド(生態系虐殺)とジェノサイドだとしてこれを批判した。

道路建設反対側は、大統領は先住民族の権利を守り、環境問題に積極的に取り組む、国立公園を保護すると公言しながらも、道路建設を進めていることを批判している。それによってこの地の先住民族の生活が破壊されるだけでなく、道路ができれば自然資源の略奪も加速され、また高地からの移住者が急増し「文化的に圧倒」されてしまうだろう、と主張している。

政府はこれに対し、道路ができることによって、ティプニスでの政府のプレゼンスが増え、違法伐採業者

を摘発したり、天然資源の略奪を防止することができるとしている。大統領は先住民族との対話を求めているが、道路建設は事前協議なしにすでに着手されている。事前協議は憲法で定められており、ティプニスの先住民族はモラレス大統領に裏切られたと感じている。

(BBC.MUNDO2011/08/11より)

【コスタリカ】 環境政策とは裏腹に世界一の農薬使用率

コスタリカは環境保存の旗手というイメージとは反対にヘクタール当たりの農薬使用量が25キロと世界一であるという報告が出た。環境問題のシンクタンクであるワールドリソース・インスティテュートの調査によるもの。コスタリカが主に輸入しているのは、強い毒性を持ち、オゾン層を破壊すると言われている臭化メチル系の農薬だ。国連の主導で作られたオゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書(すでに世界30カ国以上が署名)が定める有害物質として指定される予定である。コスタリカ国立大学毒物研究所によると、1977年から2006年の間にコスタリカの農薬輸入は340%増加し、この30年で合計16万4千817トンもの農薬が輸入されたという。

これらの農薬が使われているのは、メロン、トマト、ジャガイモ、パイナップル、サトウキビなど。毒性の強い農薬の大量使用は、さらに水の汚染をもたらしている。別の調査によれば、2001年以降コスタリカの水汚染の原因は残留農薬によるものが最も多い。また、農薬中毒も起こっている。2010年にはある綿花プランテーションで作業していた28人の女性が農薬中毒になった事件があり、その4ヵ月後には別の遺伝子組み換え綿花のプランテーションで63人が中毒した。

また去年一年では過剰な農薬を浴びる事故で146人が中毒症状を起こし、そのうち12人が死亡したとい

う。農薬の使用量が増大している背景には、伝統的な農業が衰退し、アグロビジネスによるモノカルチャー栽培が増えていることがあげられる。

(Noticias Aliadas 2011/9/1より)

【ハイチ】 国連軍ウルグアイ兵士による性暴力

18歳のハイチ人若者が国際連合ハイチ安定化ミッション(国連軍MINUSTAH)のウルグアイ兵4人に取り押さえられ性的暴行を加えられたことが明らかになり国連軍の縮小・撤退を求める声が大きくなっている。レイプの場面は携帯ビデオに撮られ、それが流出したものの。ウルグアイ政府はこの4人の兵士を送還し、謝罪した。国連軍は2004年からハイチに駐留しており、現在は12,000人の兵士が駐留している。過去にも少女がレイプされる事件などが何件も起こっている。昨年の地震で大きな被害を受けた上に、コレラが蔓延し多くの死者を出したが、これは国連軍ネパール部隊が持ち込んだとされている。今年も雨季に入り、コレラが再び猛威をふるうのではないかと危惧されている。

(Democracy Now 2011/9/6 より)

【ブラジル】 豪雨により南部で50万人に被害

アルゼンチンとの国境に近いブラジル南部で、3日間続いた豪雨により大きな被害が出、50万人以上の人々が被災した。サンタ・カタリーナ州では67の自治体で洪水や土砂崩れなどが起こった。最も大きな被害を受けた都市はブルメナウ市で都市部の70%が浸水し、被災者は28万人に上った。

(BBC.MUNDO2011/09/09より)

メキシコ留学から帰国し5年、グアテマラも前回訪れてから2年、都会のビルの中で事務仕事をしていると、いつの間にか中南米のことを考える時間が減り、あの頃感じていたはずのリアリティも遠ざかっていく、ある種の不安感にとらわれます。一方、私自身は3・11によってようやく電線の向こうにある原発という日常を思い起こすこととなりましたが、それも日々動きを伝えてくださる方々がいて持続できているのが実情です。さて、先週末はグローバルフェスタにレコムも出展しグアテマラ民芸品やアルテマヤ・カレンダーを販売しました。それらを通して、単に品物以上の何かを伝えていきたい、また『そんりさ』も日本から中南米を思い続ける手がかりとしたい、自分自身も個人的日常を越える想像力を失わないようにしたい、とあらためて思うこの頃です。(杉本唯史)

次の「そんりさ」発送作業は 月 日(土)の予定です。
参加いただける方は連絡ください。

メーリングリストのご案内： 会員・購読者は無料で参加できます。
E-mail: recom@jca.apc.org までアドレスを連絡ください

ホームページのご案内 レコムホームページがどんどんリニューアル！
<http://www.jca.apc.org/recom/>

- | | | | |
|---------|-----------------|---------|---------------|
| Vol.132 | ボリビア・ガソリン危機 | Vol.128 | ペルー・バグア事件とその後 |
| Vol.131 | エクアドル・アマゾンの石油開発 | Vol.127 | コロンビア先住民少年マウロ |
| Vol.130 | 中米に広がるナルコ | Vol.126 | エクアドル・フェアトレード |
| Vol.129 | コロンビア政治状況の変化と行方 | Vol.125 | ボリビア気候変動世界会議 |

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。
入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。
レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円（学生 5000 円）…会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円（一口）…資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004

京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556 (留守電)

お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは
留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

46万 3521円

<グアテマラ基金>

20万 1711円

(2011年9月現在)